

21世紀に入り、地球環境の変化はさらに加速されてきているように思える。経済先進諸国のみならず、中国、ASEAN などにおける近年の急速な国土開発や経済発展は、大気や海洋汚染を生み出し、地球温暖化の1つの大きな要因ともなっている。一方、世界人口の対数的増加傾向は依然としてとどまるところを知らず、必然的に弱小国においては貧困と飢饉の問題に直面し、衛生状態の悪化を招いている。また、交通網の充実や東西冷戦構造の崩壊は、世界のグローバル化を生み、モノやヒトの大規模な流通や交流が活発となっている。

このような社会的背景の変化が感染症の世界にも大きな影響を与えつつある。SARS, AIDS, エボラ出血熱のように忽然として出現した新しいウイルス性感染症、忘れ去られた感染症の再燃、そして感染性蛋白“プリオン”による感染症—狂牛病(BSE; 牛海綿状脳症)など、20世紀後半からみられるようになったいわゆる新興再興感染症の出現は、まさに社会的要因の投影であると言っても過言ではない。21世紀に入ると、これまで存在した薬剤耐性菌はさらに多剤高度耐性を獲得し、世界中に蔓延している。そして、これらの病原体に起因した院内感染症は抗菌薬療法に抵抗性を示し、臨床上的大きな問題となり、抗菌薬の適正使用が叫ばれている。

このような状況のなかで、明治以来守られ続けてきたわが国の伝染病予防法ではついに対応できなく

なり、新たな感染症予防法として100年ぶりに改定されたのは周知のことである。本書は、そのような時代の要望に応えるべく改訂出版された、時宜を得た感染症教科書として位置づけることができる。

第I章では、感染症基礎知識として宿主の感染防御機構、診断法、治療法に関する最新の知識が網羅されており、第II章では個々の感染症について、第III章では臓器別に感染症を分類し、それぞれの分野における第一線の感染症専門医、研究者によってわかりやすく記述されている。

さらに、今回の改訂では本邦ではいまだ報告されていないウエストナイル熱、ニパウイルス熱、リッサウイルス熱などの新たなウイルス感染症なども取り上げられ、丁寧な解説が加えられている。

また誌面も2色刷りで見やすく、さらに読者の知識の整理のため、テスト形式のコラム Short Notes が随所に掲載されている。巻末には付表として感染症法に基づく分類表と、疾患別にみたわが国における最近の報告症例一覧や、235種類におよぶ病原微生物の種類とそれらの特徴をまとめた概説表、微生物危険度分類、ワクチン一覧表も掲載されている。

本書は、医学生、研修医、そして感染症専門医も含め、多くの医療関係者にとって実用性の高い価値ある教科書といえるだろう。

(B5判 400頁 定価5,775円(本体5,500円+税5%))
2004年 医学書院 刊